第1部　エッセイ

テーマ「思い出のお弁当」

一般の部

佳作

出番のない日のお弁当

山田　堅太

中学二年のころ、僕はサッカー部のレギュラーだった。試合の日、母はいつも僕より早く起きていた。卵焼き、肉のおかず、野菜、果物。夏は傷まないよう工夫され、今思えば、走る僕の胃に重くならないものばかりだった。働きながら弟や犬の世話もしていた母の弁当は、いつも少し豪華だった。ふたを開けるたび、僕は誇らしかった。

三年生になり、顧問が替わった。背の伸びなかった僕は、十五センチ以上大きな同級生にポジションを奪われた。すぐ取り返せると思った。誰より走り、紅白戦や練習試合では点も取った。それでも公式戦の日、僕の名前は呼ばれなかった。仲間がアップする横で荷物を運び、試合が始まれば少し離れた場所から声を出した。ゴールが決まれば笑って拍手をした。でも、笑うたびに胸の奥が痛んだ。母や父のいる方を見るのも嫌だった。「二年生のときは出ていたのに」と思われている気がして、恥ずかしかった。昼になると、母の弁当を開いた。レギュラーだったころと同じ、彩りのいい弁当だった。一秒も出ていない自分には、立派すぎる気がした。ある朝、僕は言った。「俺、どうせ出られないから。おにぎりだけでいいよ。」母は手を止めずに言った。「お母さんは信じてるから」

結局、中学三年の一年間、僕は公式戦に一秒も出られなかった。それでもサッカーを辞めなかった。サッカーが好きだし、負けたくなかった。月日は流れ、大学生になった僕は、ある大会で日本一になった。首からメダルを外し、母に渡した。「ずっと弁当、作ってくれてありがとう。」母は、あのころと同じ顔で笑った。あれから二十年。メダルは今も実家にあり、母が大事に持っている。このメダルの半分は母のものだ。

母が信じていたのは、試合に出る僕ではなく、サッカーを好きでいる僕だった。あの弁当を食べながら、僕はいつか、母が信じた自分に追いつこうとしていたのだと

思う。